



#### 木簡学会第24回研究集会

今年も恒例の木簡学会総会・研究集会が、2002年12月7日・8日の両日にわたって、平城宮跡資料館講堂で開かれました。

7日は総会の後、研究集会を行い、田良島哲氏(文化庁美術学芸課)に「中世の木札文書」という研究報告をいただきました。田良島氏の報告は実態のよくわからなかった中世の木簡使用のあり方について文献史料から検討を加え、これまでの研究の空白を埋めるものです。木簡の使用は古代だけでなく中近世を通じて続き、最近出土事例も増えていますので、今後の本格的な議論の展開が期待されます。

8日は渡邊晃宏(奈文研)「2002年全国出土の木簡」で2002年の木簡出土状況を概観した後、『日本書紀』にみえる白錦後苑の比定地ともされる飛鳥京跡苑池遺構の発掘調査の概要について、調査を担当された奈良県立橿原考古学研究所のト部行弘氏から「飛鳥京跡苑池遺構の調査の概要」と題するご報告をいただき、また出土した木簡について解説に当たっている同研究所の鶴見泰寿氏から「飛鳥京跡苑池遺構出土木簡」というご報告をいただきました。木簡の時期は天武朝から八世紀までの長期間にわたり、遺跡の性格も含めて活発な議論が行われました。

木簡学会は現在個人会員327名、団体会員4団体、

海外会員3名から構成されています。木簡そのものを研究対象とする日本で唯一のユニークな学会で、平城宮跡発掘調査部史料調査室に事務局をおいて活動しています。12月の恒例の研究集会の他、毎年各調査機関及び担当者の方々に多大のご協力をいただきながら、前年の木簡出土情報を中心として掲載する会誌『木簡研究』を刊行し（最新刊は2002年11月刊の24号）、全国の木簡出土の最新情報を発信しています。ご協力いただいている関係各機関にこの場を借りてあつくお礼申し上げるとともに、今後とも変わらぬ情報提供をお願い申し上げる次第です。情報発信の場として木簡学会を是非ご活用いただければと思います。（平城宮跡発掘調査部 渡邊晃宏）



石神遺跡木簡についての説明風景